

## \*はじめに

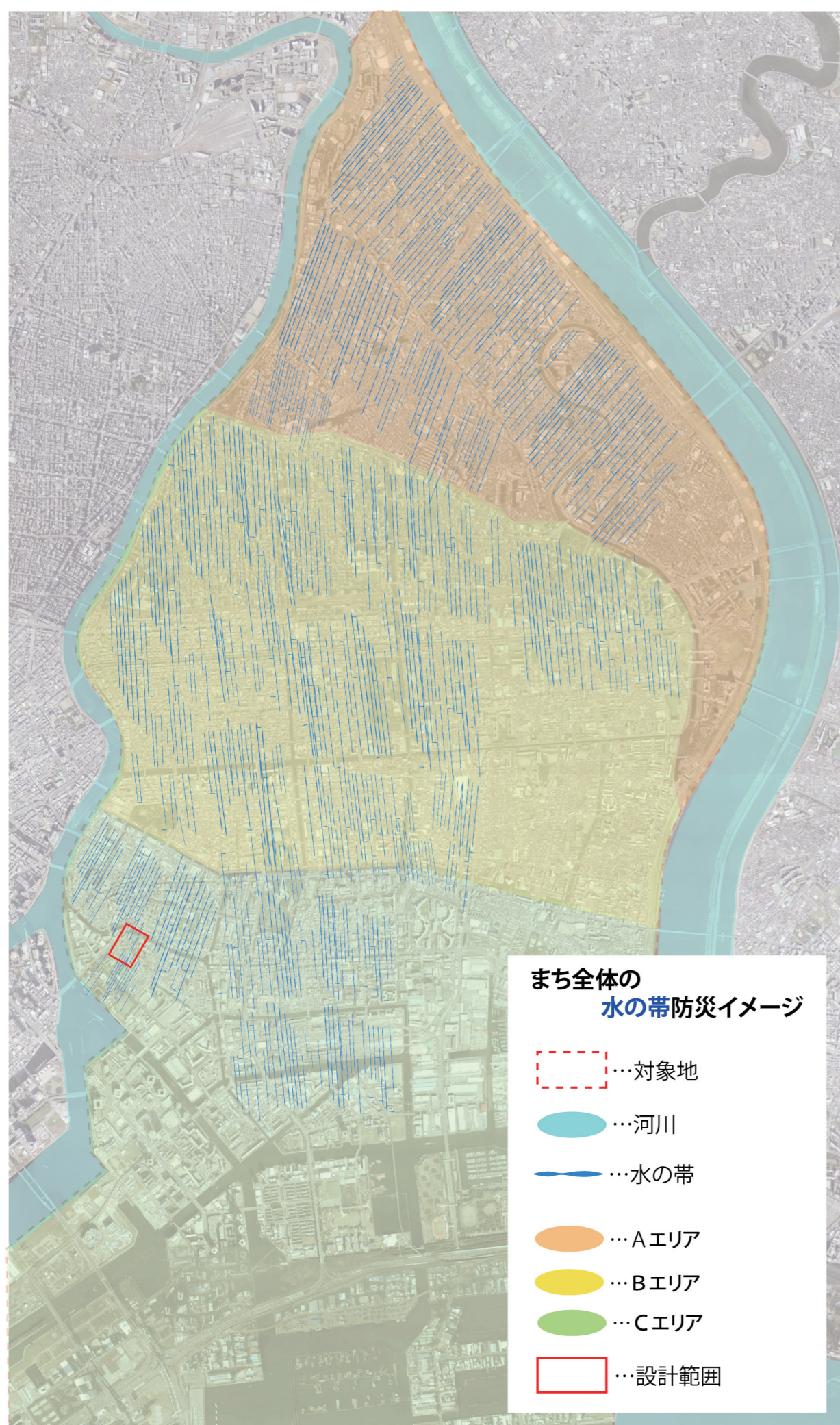
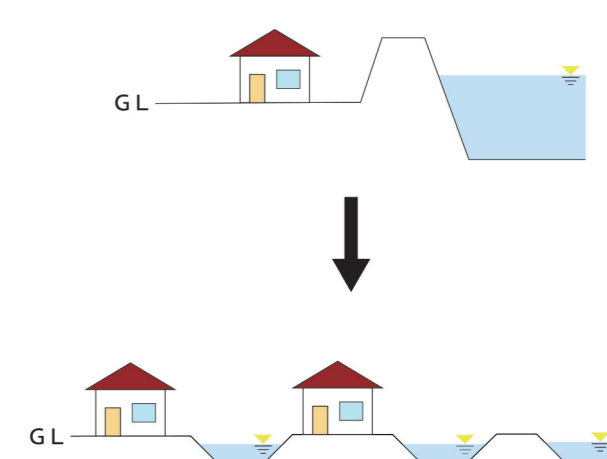
記憶に新しい東日本大震災では、予想範囲外の津波が襲ったことにより、防潮堤が壊れるなどして被害が拡大した。いくらシュミレーションしていても、人々の命を守る役割を構造物だけに任せていくのは危険であるとともに、防災に重きを置く構造物はまちの景観や人々の暮らしを壊しそこねない。これからは、人々の生活とともに強く根付いていく防災の在り方が必要となるのではないだろうか。そこで私たちは、日々の暮らしに豊かさを与え、普段何気なく利用しているもの、かつ災害時には『減災』出来るシステムを提案する。

## \*コンセプト

私たちが提案するのは、『日々使える場所』であり『災害時の対応も出来る場所』である。現状高くなってしまっている堤防を低くし、江戸時代に水路であった場所を新たな形で復元させ、水空間を増やすことで流量を分散させる(ダイアグラム参照)。さらにその空間は、普段は人々の交流の場、遊びの場、趣味の場、学びの場として活用することが出来る。まちに水路を埋め込むのではなく、水空間にまちがシフトして一体となるような空間にする。その水空間のひとつひとつをここでは水の帯と呼ぶことにする。

## \*ダイアグラム

～集束型から、分散型へ～



## \*対象地「東京都江東区」

…人口 480271 人、世帯数 241052 世帯

江東区は隅田川と荒川に挟まれており、AP (Arakawa Peil: 東京湾平均海面) + 2.0 m と、低地帯であることが挙げられる。

さらに、この付近は江戸時代から水路が縦横に発達しており、水彩都市、水辺のまち、川の手などと呼ばれている。江戸時代からの水路や掘割は、すでに埋め立てられて道路になっているもの、親水公園に変わっているものも多くあり、周囲には防潮堤や堤防が多く存在しているのが現状である。

## \*デザイン (まち全体)

A エリアでは、隅田川・荒川の洪水の際に一番被害が大きい地区であるため、水の帯の流れは少し速い地域である。そのため、水を取り込むエリアであると考えます。

B エリアやC エリアでは、流れも緩やかになるため、住民との付き合いが生まれてくる。周りの公共空間や公園まで水の帯をのぼすことで、水の帯を辿れば人が集まっている空間にたどり着くことが出来る。

さらにC エリアにはその施設に様々な機能を付加させるとともに、遊水地を設ける。

## \*デザイン (設計範囲)

### ■レベル設定

水位が高くなることを想定したレベル設定としていて、住宅の高さは現在と同じ位置であるが、歩道は住宅地レベルよりも 2 m、道路に埋め込まれてしまった水の帯の部分は 2.5 m 掘り下げた。ここは、『浸水してもよい場所』として考える。

### ■水の帯

水の帯のまわりには、必ず歩道が設けられていて、そこは通勤通学に使う人、散歩道・ジョギングコースとする人、小さい子の遊び場など、日常の様々なシーンで利用することができる。

### ■歩道

街区から歩道へと延びるスロープでは、住民が自由に使うことの出来るスペースとする。各自の家の前のスペースでは、洗濯物を干す、畑を行う、花を植える、バーベキューをするなど、思い思いの使い方が出来る。

### ■街区の駐車場

一街区につき 1 か所以上の駐車場を設けて、その街区の人は同じ駐車場を使い、街区内を歩くようにすることで、都市部にみられる『隣に住む人が分からない』システムを解消することも出来る。

